



主要目	
建造所	三菱重工下関造船所
進水年月	1974. 10. 1
航行区域	遠洋区域
総トン数	5,656.0トン
長さ	109.28m
幅	16.28m
主機関出力	8,900PS
速力(最大)	17.88ノット

昭和44年、噴火湾(砂原~室蘭間)に、18mm中継器付海底同軸ケーブルが敷設され、試用試験の結果良好な成績を収め、更に広島~松山間で商用試験が決定し国内通信情報は益々多様化時代を迎えていました。

また、昭和47年には沖縄諸島が返還され、南北2,000 哩に及ぶ広大な海域に分布する海底ケーブルの建設、保守に必要な敷設船として本船「黒潮丸」が建造されました。

本船の特長は、

1. 長距離中継器付海底同軸ケーブル及び光ファイバーケーブルの敷設同時埋設が可能なこと。
2. 修理及び建設工事に対応するため船首にドラム型、船尾にリニア型ケーブルエンジンを備えたこと。
3. 工事、海洋調査(船位・船速等)情報を中央コンピュータシステムにより処理し、工事情報等を自動化したこと。
4. 水深500m 対応のスキ式埋設機の制御設備、揚降装置を装備し

敷設同時埋設を可能にしたこと。

等が上げられます。

本船は就航後、数々の主要幹線路の建設を実施していますが特に次の工事があげられます。

1. 宮崎~沖縄間中継器付海底同軸ケーブルの敷設。(52.5)
2. 宮崎~沖縄間中継器付海底光ファイバーケーブルの敷設。(61.11)
3. 気象庁海底地震常時観測システムの建設。(53.7~62.8)
4. アセアン諸国間を結ぶ中継器付海底同軸ケーブルの敷設埋設工事。

(1)シンガポール~インドネシア間(54.12~55.3)

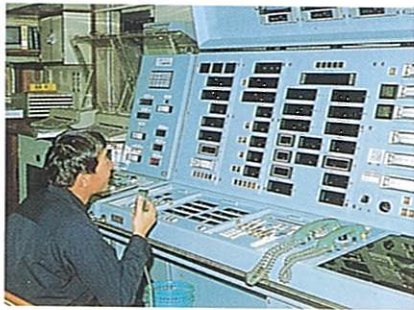
(2)シンガポール~マレーシア~タイ間(57.7~57.10)

(3)マレーシア~インドネシア間(58.7~58.8)

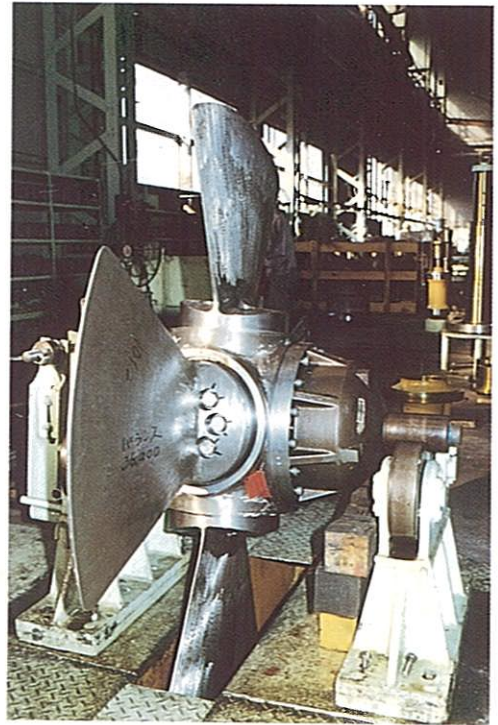
昭和63年11月、ケーブルタンク等の大改装工事を行い、海外工事受託を目指しています。



▲進水式



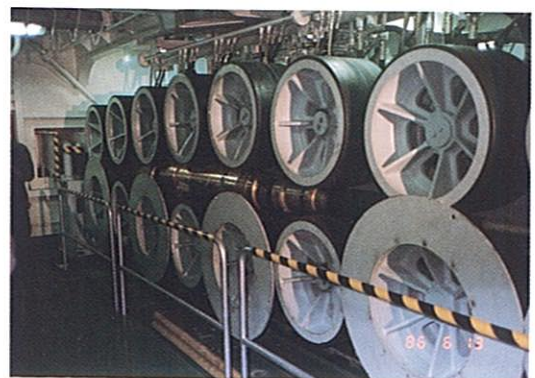
▲操舵室後部のケーブル制御室、室内には、NEC製S-10型コンピュータ及び自動化に伴う装置が配置されている。



▲サイドスラスタ
船首側 800PS、船尾側 500PS。



▲船首バウ・シーブ
(車輪直径3.0m)



▲昭和60年12月に搭載されたりニア・ケーブルエンジン。60年3月八戸～苫小牧中継器は光ファイバーケーブル敷設埋設工事に威力を発揮する。
(タイヤ直径0.6m、捲揚能力5.6トン)



▲左舷ドラム積込中。
(ドラム直径3.8m、捲揚能力30トン)



▲光中継器、ベルマウスからC甲板へ。



▲光中継器ドラム通過中



◀昭和61年6月、八戸～苫小牧間
有中継光ケーブル敷設埋設工事
のため苫小牧陸揚でP-4型埋設
機設置中。



▲深海洋底に設置される先端装置。
御前崎沖(S. 53.7)、房総沖(S. 62.8)



▲昭和58年10月三宅島大噴火の際、
救援資材を積込む黒潮丸。
(シーリフトクレン捲揚能力20トン)



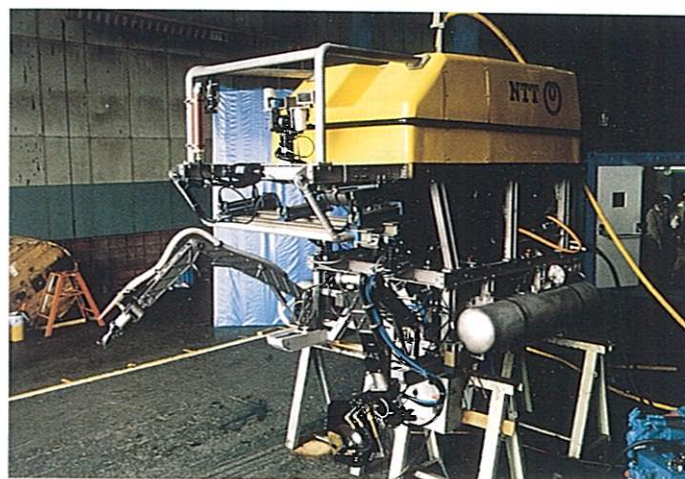
◀ 昭和57年9月、マレーシア・クアantan沖ですれちがう、KDD丸。
本船は、タイ国内のペチャブuriより第1回目の敷設埋設工事を終えてシンガポールに2回目のケーブル及び、その他を補給に向う途中。



▲昭和63年国際調達した、水中ROVの機能確認のため海洋実験中。



▲船尾。着水・揚収装置上のブークルと中継基地。



▲ブークル(水深1,000mまで)マニピュレータをのばしたところ。